



Title	お茶、その文化と健康を考える : 第31回衛生教育大阪大会・第35回公衆衛生大阪大会より
Author(s)	角山, 榮
Citation	大阪公衆衛生. 1993, 63, p. 2-9
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83835
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

講演

「お茶、その文化と健康を考える」

～ 第31回衛生教育 大阪大会より ～
第35回公衆衛生

奈良産業大学教授・和歌山大学名誉教授 角 山 榮

お茶というのは、大きく分けて緑茶と紅茶、この紅茶の場合はお茶を醗酵させたものです。その醗酵を途中で止めたのがウーロ茶なんです。大体この三つがあって、そしてそのルーツは、これは世界の中でも中国なんです。中国の雲南、ビルマとの境の雲南がルーツなんです。中国では古代からお茶を飲んでいる。

現在中国をルーツとするお茶が全部世界中の人が飲んでいるお茶になったんです。もちろん、日本にも本来お茶があったか、いろいろ議論があるところですけども、あとで申し上げるように大体中国からきた。ヨーロッパのお茶と言えばイギリスは3度、3度の食事だけでなく、1日中何回もお茶を飲む。お茶がなければ暮らせない国民なんです、そのイギリス人がいつ、どのようにしてお茶を飲むようになったのか。

イギリス人とお茶

ヨーロッパというのは本来寒いところなんです。お茶というのは、これは本来植物から言いますと暖かいところのできるんで、したがってヨーロッパのようなあんな寒いところにはお茶は本来できない。現在もできません。ところが、そのイギリスでお茶がなければ暮らせない国民になったのはどうしてか。

中国では非常に古くからお茶を飲んでいました。したがって、今はやりのシルクロードを通過してどんどん、どんどん中国からあの砂漠を通過して、そしてヨーロッパへ行っただろ

うと、絹と一緒に普通そう考えられると思うんです。

ところが、マルコ・ポーロがちょうど13世紀の終わりに北京にやってきた。そして、「東方見聞録」というのを書いてるんですけれども、ところがそれを見てもお茶というのは全く出てきません。したがって、それ以前はもちろんのこと、中世のヨーロッパにおいてもお茶というのを知らなかった。これは不思議なことです。そうすると、どうも陸路、あのシルクロードを通過してヨーロッパへいったのではないらしい。これは、中国をルーツとするお茶がどうしてヨーロッパへ行ったのか。これは一つのなぞなんです。

初めてヨーロッパ人がアジアへ来てお茶を中国人が飲んでいるのを見たのは、1560年ごろなんです。そのときに、中国で見たお茶をどう書いてるかということ、おもしろいことにお客さんが来たらお客さんに出すお茶、それも先に葉が入れてあって、そしてお湯を注いで、そして蓋がしてある。今もそうですね。そういうお茶、つまりお茶というのはお客さんが来たときにもてなす飲み物だと、それからもう一つは葉だということが書いてあるんです。この葉はいろんな病気に効くということが書いてあるんです。

ところが、一方、ヨーロッパ人が日本へ来ました。日本へ来たときに、日本で見たお茶、これは中国で見たお茶と違って、非常にびっくりして、感動を込めて書いてるんです。特に宣教師の人たちが日本にやって来ましたが、

その人たちの記録を見ますと、一杯のお茶を飲むのに、どうしてわざわざ狭い小屋を建てんならんのか。その小屋に入るのに、なぜあんな小さな穴から身をかがめて入らんなんのか。これをじいっと見とるわけですよ。

そして、その小屋の中で、薄暗い窓もろくにはないような、そういった中でどうして飲んでもか。飲んでるお茶碗と言え、びん曲がった、そしてひびが入ってるような、そういうお茶碗、この茶碗も彼らが南方から日本へ来るときに南のほうで見た。そうすると、これは小鳥に餌をやるときの器であると、しかも日本人が飲んでる茶碗たるやものすごい高い値段がついてる。しかも、自分たちがダイヤモンドやルビーを大切にすると同じように、もっとこれに全財産を打ち込んで。彼らはびっくりしたんですね。

茶 の 湯

ところが、そのお茶が値段を聞いてみると、茶碗も高いけれども、ものすごい値段、銀の重さと同じぐらいの値段がする。そして、チンチンとお湯がたぎっているお釜、これも古ぼけた、彼らにとってはあれは一体何だろうと、こういう茶の湯、この茶の湯を見て非常に彼らは感激したんです。

私、実は経済の歴史を専門にやってるんですけど、私たちの専門の分野から言いますと、その当時の日本というのは世界の恐らく最も豊かな国の一つじゃなかったか。16世紀と言いますと、これは普通世界史を習われた方は、あの時分はスペインが日の没するところのない国をつくったということになっていて、世界一の強国である。

ところが、そのスペインの富の基は何かと言うと、スペインが大西洋から渡りまして南アメリカを探検してた。そのときに、まずコロンブスがアメリカを発見しました。そして、さらにメキシコのほうを探検し、そして

南のほうに行くにつれて、そこにすばらしい銀山があった。その銀がスペインの手に入っていく。そして、1545年、ちょうど16世紀の中ごろに現在のペルー、ボリビア、あそこにポトスの銀山という世界一の銀山がある。その銀で繁栄していたのがインカ帝国なんです。それをスペインが押さえた。その銀を船に積んでスペインに持って帰ったので、この銀でもって世界一の大国になったと、これが普通言われていることなんです。



ところが、私たちの立場から研究が進みまして、そのスペインが南アフリカから本国に持って帰った銀の量が大体わかってるんですけど、それが16世紀の中ごろから17世紀の初めにかけて、ちょうど信長とか秀吉、そして家康のあの江戸の初めですね、あのころの日本の金銀が出たこの産出量というのは、そのスペインが持ち帰った銀にほとんど匹敵する。

今の日本の国、世界の国は全部国の富をGNPで計るわけですけども、その当時の富の金銀がどれだけあるかという銀の保有量で派閥炭です。そうしますと、これは今から考えてみると、その当時の日本というのはスペインに負けないぐらい豊かな国であったとい

うことがわかる。

この富、実はある当時の生野の銀山、岩見の銀山、それからやがて佐渡の金山、至るところに日本中銀が出た、金が出たんです。この金銀のおかげで東山文化が栄え、そして秀吉の時代の大判・小判、これ全部純金ですよ。こういうばかでかい金貨をつくったというのは、世界中でもあまりないんです。それほど日本は金が出た。そして、金箔を金閣寺、あるいは銀を銀閣寺にふくほど、ものすごく金銀にあふれていたんです。

その世界一豊かな国日本人が、しかも金持ち階級、そして武士階級、支配階級、これがすべて茶の湯に財産をすべて入れ上げてる。この姿に彼らはびっくりしたんです。中国で見たお茶であればもてなしのドリンクだと、あるいは葉だと、ところが日本の場合は文化として、彼らがびっくりしたぐらいの豊かな日本で最高の支配階級、あるいは武士階級、あるいは町人の金持ち階級がすべて入れ上げてるのがこれだと、やはり優れた芸術というのは人を感動さすんです。

長いスプーンは茶笏？

これに感動して初めてそこでお茶を彼らは発見した。同時に、文化として発見した。そして、これを飲んでみようということで、初めてそこで彼らがお茶を飲んでヨーロッパに輸入しようとした。事実調べてみますと、ヨーロッパに入ったお茶の第1号は、実は日本の平戸からオランダの船に積まれて、そしてジャワを通してアムステルダムへ持って行ったのが1610年です。ちょうど関が原の戦いの10年後なんですが、それが第1号です。こうして、ヨーロッパに初めて、シルクロードではなく日本において彼らが発見したお茶が、そのお茶を飲んでみようということで海を渡った第1号であった。

ところが、このヨーロッパに渡ったお茶で

すね、初め緑茶でした。抹茶でした。もちろん葉もありました。これがオランダに入った。やがてそれがイギリスに渡っていきます。イギリスに渡っていくときに、もちろんお茶だけが入ってきたわけじゃなくて、ほとんど同時にコーヒーも、ココアも、お茶も、大体三つ一緒に入ってきました。

ところが、イギリス人がお茶を飲むようになったのは、そのころ国王がチャールズ2世といって、あのかときにはクロムウェル革命があって、イギリスの王さんが首をちょん切られるという、フランス革命の120〜30年前にそういう事件があったんですが、そのために王さんがフランスに逃げてたんです。それが王政復古で連れ戻されて王位についたのが1660年、チャールズ2世です。そのチャールズ2世がお嫁さんをもらうことになりまして、そして1662年にポルトガルからキャサリンという王妃が来るわけです。ポルトガルではどうもお茶を飲んでたんですね。その彼女が来て、そして宮廷にお茶を飲む風俗をもたらした。

そのときに、ヨーロッパに入ったお茶は単なるドリンクじゃないと、日本から文化として入ったものですから、東洋風の飲み方をしなければならぬということで、彼らが開発した飲み方、これがおもしろいんです。

お茶をどうして飲んでいいのかかわからないので、お茶の葉を中国風に入れまして、そしてここへお湯を注ぐ。飲み方を知らんものですから、このお茶を飲むんじゃなくて出がらしのお茶の葉をバターと塩をつけて食べた。それは、アメリカへ渡ったイギリス人もそんなことをやってたと書いてあります。

また、別の飲み方では、東洋風ですから、ハンドルのついてないカップで飲んだ。ところが、日本ではこんな受け皿はありません。スプーンもお茶を飲むのについてません。なぜこれがついたか。これは、砂糖とミルクを入れたものですから、かき回さんならん。だ

から、これがついたわけです。ところが、あの当時は柄が長いんです。

そして、どのようにして飲むか。お茶というのは文化だから飲み方、マナー、これが重要だということで彼らはどのようにして飲んだらいいのか、大変気にしたんです。マナー集の中にお茶の飲み方というのが入ったわけですが、受皿はそのときすでについておりました。しかし、こんな浅いんじゃないくて、もっと深くなってる受皿なんです。このお茶を受皿へ移して、大きな音をたててすすると書いてあるんです。そして、飲み終わったらこれを蓋する、片づけるのは男性の役目だそうです。片づけてほしいというときは、スプーンで茶碗をたたくと書いてあるんです。飲む前にスプーンを横渡しにすると書いてあるんです。

これはやはりお茶というのは本来日本で彼らは発見したんですから、日本式というものをかなり意識している。ところが、彼らはあのときはまだ日本とか中国がごっちゃになってますので、この飲み方が彼らとしては一番気になっていた。この受皿というのは日本にないから、どうしたかという、日本でも天目茶碗の台がありますね。あれからこれがきたのか、あるいは日本には瀬戸物の受皿がありませんから、茶托ですね。茶托からきたのか、そのへんがもうひとつよくわからないんです。

スプーンというのは彼らは前からあるんですが、ただし柄の長いスプーンというのはありません。柄のながいスプーンは何からきたのか。どうも茶筴じゃないかと思うんです。

お茶が世界史を動かした

初めは緑茶を飲んでたんです。ちょうど18世紀の中ごろからお茶の輸入が、初めて日本から行ったんですけれども、日本は鎖国しますね。したがって、イギリス人の飲むお茶は

全く中国からだけ輸入していたわけです。したがって、中国から輸入してたのは東インド会社ですが、その会社の記録を見ると、18世紀の中ごろから、初めは緑茶のほうが多いんです。ところが、18世紀の中ごろから紅茶に変わっていくんです。

貿易摩擦というのは怖いですよ。輸入がどんどん増えていく。それに対して、普通だったらイギリス特産の毛織物を持って行って中国に買ってもらって、そしてお茶の輸入と相殺して貿易のバランスがとれるわけですけど、中国というところは何でもあるから、ほかのものは要らんねんと、こう言うわけです。要るのは、結局お前らが欲しいいうからお茶を分け与えてやっとなんと、分け与えるといってもただでやってるわけではない。そうすると、何か持ってこい、何かというと銀を持ってこいというわけです。紅茶の消費がどんどん増えるにつれて、輸入が増える。輸入が増えれば、銀がどんどんイギリスから減っていくわけです。

それで、イギリスはこれはえらいこっちゃ、何とか自分らの植民地で栽培できないか。植物学者もお茶というのを見たことがないんです。お茶の種もわからない。そういう形で、結局どんどん、輸入超過、そうすると困るものだからイギリスはインドで阿片をつくり、そして、その阿片を輸出して、その代金を銀でもらって、その銀でお茶を買うという、そういう三角貿易になった。

この貿易摩擦が最後は戦争になりました。どうなったか。阿片戦争です。阿片というのは人間を腐った人間にする。こんな阿片をどんどん、お茶を売るたびに増えていくんです。さすがの中国もこんなことじゃということで、そして広東に持ってきたイギリスの阿片を海の中に投げ入れた。あるいは、火をつけて焼いてしまう。待ってましたとばかり、イギリスが中国に攻めていく。これが阿片戦争です。1839年～42年です。せっかく中国がイギリス

に供給していたお茶が仇になって、中国はイギリスの大宝のもとで半植民地になっていくという悲劇がここに起こる。

つまり、お茶が世界史を動かした。イギリスがお茶を飲んだために、世界中がひっくり返ってしまった。それまでは、彼らはアジアに憧れてたんです。お茶もそうです。木綿もそうです。インドの木綿というのは世界一の木綿であって、それを輸入してきて、そしてイギリスのマンチェスターの産業革命が起こってくるんです。

とにかく、アジアに憧れる。彼らはコンプレックスを抱いてる。そのコンプレックスが逆にアジアを攻めるという形になった。こういう文化が、私に言わせたら紅茶文化です。イギリスやヨーロッパに渡って文化は、そういう世界史を動かす攻撃的な、これを私は紅茶帝国主義と呼んでるんですけども、そういう文化をつくった。

それに対して、中国から日本にやってきたお茶は、いつごろどういう形できたか。13世紀の初め、ちょうど鎌倉時代です。宋へ留学した栄西禅師が、日本に薬として持って帰ってきた。それで書いた本が「喫茶養生記」です。これは1211年に出ています。

宋の時代になって、まさに不老長寿の薬というのがお茶だということがわかった。そのときに留学したのが栄西禅師でありまして、中国は、当時世界最高の文明国で、その中でも最先端の薬としてお茶を持って帰ってきた。そのお茶を持って帰ってきた栄西が、例えばこういうエピソードがあります。ちょうど頼朝・実朝の時代、この2人は仲が悪くて、実朝はいつもやけ酒を飲んでうさを晴らしていた。いつも二日酔いやった。それに、栄西禅師が持ってきた抹茶を与えたところが、二日酔いがケロッと治った。こう言われているわけです。

こういうふうな薬として入ってきた。そのときに書いたのが、今言った「喫茶養生記」

です。ここの最初に何が書いてあるか。「茶は養生の仙薬なり、延命の妙術なり」、つまりお茶というのは不老長寿の薬である。仙薬である。そして、延命の妙術である。こういう形で入ってまいりました。

ところが、日本へ入っていたこの薬としてのお茶がその後どうなったか。日本というところはおもしろいところでして、お茶を日本人はやがて貴族は遊芸と言いますか、遊びにしていって。日本人は遊びが下手だと今盛んに言われていますけれども、お茶を遊びにしたんです。どんな遊びにしたか。当茶、お茶のあてものです。5人が向かい合わせに並んで、そしてお茶を注いでいくわけです。第1回目、2回目、3回目、4回目、5回目と注いでいく。最初は宇治茶、それから嬉野茶とか、狭山茶とか、そのお茶の銘柄をあてる。この遊びにしたんです。これを当茶と言うんです。

ところが、そのお茶の遊びからさらにこれを、堺という当時日本で最も栄えていた町に茶人が出てきて、村田珠光、武野紹鳴、そして利久、この3人の大茶人がお茶というものを茶道という道にした。芸術にした。どうしたか。これはここで説明する必要もないと思うんですけども、お茶は単なるドリンクと違う。お茶というものはすべて、立居振舞いから、そしてお茶を飲むところの舞台のセットから、そしてお茶の飲み方から、入れ方から、これをすべて芸術にした。

薬としてのお茶

お茶の薬というのはどうなったか。これは、ちょうど江戸時代の中ごろに貝原益軒という人が、これは「養生訓」というのを書いた人ですが、これを見てみるとどんなことが書いてるか。お茶は薬だということを書いてるかと思うと、「お茶の効能と害について」と書いてある。お茶は必ずしも効用ばかりじゃな

いと、害もある。大体この貝原益軒という人はバランス論ですね。健康を保つためには、とにかく心を静かにして、安らかにして、そして身をこまめに動かすことだと、こういうことを言ってるんです。だから、お茶も適当に飲むほうが良いというようなことなんです。

しかし、このときにちょうど、元禄時代の初めに長崎に来たケンペルというオランダ東インド会社の医者ですが、彼が日本でお茶の情報を得ております。どう書いてあるか。お茶は結石にいいと書いてある。大体ヨーロッパ人は肉食ですから、腎臓結石、それから胆石が多いようです。ところが、それに対してお茶がものすごく有効である。日本はそれにかかる人がほとんどないというようなことまで書いてる。だから、ヨーロッパ人は日本のお茶の効能を見ていたわけです。ところが、日本の江戸時代の中では、お茶の効用というのは影が薄くなって文化としてのお茶の面、茶の湯の文化の面が非常に強調されてる時代でした。

ところが、明治維新になって、日本は開国、外国と貿易しなければならない。そういうときになって、えらいことが起こってきた。日本は外国に対して何かを売らなければ、世界市場の中で生きていけない。何を海外に出したらいいか。今まで積極的な貿易は全くやってないものですから、何を売ったらいいかわからない。外国人が横浜の居留地に来る。そういう中で彼らが求めたのは、生糸とお茶でした。日本人は初めて、あっ、彼らはお茶を求めるとわかったんです。

そのときは、実は世界のお茶はイギリスが支配してた時代ですから、紅茶なんです。ところが、日本は紅茶を知らんわけです。狭山とか、静岡のお茶を持っていった。そうすると、居留地の一角に工場を彼らは持っていて、そこで何をしてたかと言うとそのお茶を紅茶に変えてたんです。ところが、それを知らん。知らんけれども、どうもお茶が彼らが求めて

いる日本の商品だと、そうすると日本は今までお茶を文化として私たちは見てきましたが、今や商品なんです。商品になったら売れるお茶をつくらないといけない。何が売れるのか、わからない。紅茶が支配してるという情報も全く日本にはない。大体紅茶のつくり方も知らん。醗酵さすというのを日本人は知らないわけです。そこで、緑茶を売り出す。緑茶が売れた。どこで売れたか。初めイギリスが買ってたんですが、イギリス人はこんなもの飲めないというので、どこへやったかと言うとイギリスからアメリカへ輸出してたということがわかった。だから、それより日本はアメリカへ、太平洋を越えてアメリカへ出そうということを出した。

文化か健康飲料か

ところが、向こうでどないして飲んでるかということを全然知らなかった。大体ヨーロッパは、イギリスが支配しておりますから紅茶文化なんです。ところが、日本から出ていった緑茶はアメリカで、紅茶を買えない貧しい人たちが緑茶で辛抱してたんです。

そうすると、これはおもしろいことに、日本がお茶をアメリカに輸出してますね。そうすると、イギリスは中国を阿片戦争で結局中国のお茶を手に入れたんだけど、自分とこでようつくらなかった。しかしながら、ちょうど阿片戦争をやっているところに、偶然にのことにインドのアッサムでお茶というのが発見された。原住民はこれをチャ言うて飲んでますよという情報が入ってくるんだけど、いや、違うと、お茶はこんなものと違う。こういう小さいものやというて聞かへん。最後までわからなかったんやけど、そやな、お茶の味がするなということで、やってみよう。

別の種類だということがだいぶあとでわかるんですけども、インドでつくったお茶が世界市場に、アメリカにもきていた。そこに

日本のお茶、商品としての緑茶が世界中で、インドが、あるいはやがてスリランカが、これはごく新しい明治維新以後にスリランカでできたお茶が、世界市場で日本のお茶と戦うことになった。

万国博というのが1900年にパリで開かれました。そのときに、日本はお茶を売るために茶店を建てまして、そこで日本茶の宣伝をした。そうすると、それを邪魔するかのごとくインドがその隣に大きな茶店をつくって、そして二つの店を並べて互いに、いわば夜店の呼び売りみたいなものです。日本はどういう宣伝をしたか。来る人にお茶というものはミルクと砂糖を入れるものと違うんだと、お茶というのは味と香りを味わうものだ、日本文化を味わうんだと、こうきたわけです。

ところが、来るお客さんは、いや、そんなこと言わんと砂糖とミルクちょうだいと言ってるわけです。隣のインドのほうの紅茶の宣伝、宣伝文句は何か。日本の茶は手もみで衛生に悪い。汚い。色ついてる。これは、今で言う食品公害だと。ところが、こちらの紅茶は機械でちゃんとしている。清潔で、しかも栄養表を示してこちらには何があり、ビタミン何がありと、こう言った。

健康飲料として宣伝したインドの紅茶、文化として宣伝した日本のお茶、この勝負はどちらが勝ったか。文化が負けた。健康が勝った。そして、日本の緑茶は輸出が伸びない。

お茶の薬用効果

ところが、最近変わってきた。80年代の半ばごろから、日本茶が今まで文化、文化とばかり言ってた日本茶が、お医者さん、静岡県県の県立の薬学部、東京の遺伝学研究所、それから名古屋の医大、それから外国人を含めて日本茶を研究し始めたら、えらいことがわかってきた。お茶の成分の中に、私たちが今まで渋味というものの、タンニン、その中のカテキ

ンが薬用効果を持っているということが初めてわかってきた。

一昨年ですね、国際会議がニューヨークで開かれ、日本でも静岡と掛川で開かれ、そして中国でも国際会議が開かれたんですけども、今やお茶の文化の時代からお茶の薬用効果が次から次へと学会で発表されてる。静岡に小國伊太郎さんという人がいらっしゃるんですけども、この人なんか統計表を見てたら日本人の中で胃ガンがものすごく少ない地域がある。どこか。静岡です。静岡県が非常に少ない。しかも、その中でも特定の、お茶をつくっている村、はっきり言うたら川根町、こお川根町の住民がものすごく胃ガンにかかる人が少ない。

おもしろいということで、小國さんがよく調べていくと、ここの人は朝から晩まで何回もお茶ばかり飲んでる。そうすると、そのお茶にはどうもガンの発生を抑制する作用があるのとちがうかということがわかってきて、調べていくにつれてタンニンの中のカテキンというのが、その作用をするんだということがわかったんです。

だから、お茶の成分と効能のところで、カテキン類、これは発ガン抑制作用、それから抗腫瘍作用、突然変異抑制作用、抗酸化作用、血中コレステロール低下作用、それから、血圧上昇を抑制する作用、血糖上昇抑制作用、抗菌作用、抗インフルエンザ作用、虫歯予防、口臭予防、あとカフェインだとか、ビタミンCがあります。

これはちょっと言うときますけれども、ビタミンCは紅茶にないんです。お茶はビタミン豊富な野菜と書いてありますが、そのところにビタミンA、ビタミンCと書いて、紅茶のところを見ていただきますと紅茶にはビタミンCがないんです。緑茶にはビタミンC、ストレス解消、風邪の予防。下にビタミンB群それからγアミノ核酸、このギャバ、これも今ギャバロンとか何とかいうお茶のエッセ

ンスが、ここに持ってきたんですけれども、こんなんがギャバロンということで今売り出し中ですね。血圧を下げる作用がある。とにかく、この間も見ていると、今問題になっているMRSAですね、これもお茶でうがいをするれば予防になるという記事が出ておりました。だから、何が出てくるやらわからない。

ウーロン茶でお茶漬け

こういう状況に今なってきました、今お茶が見直されている。それやったらお茶を飲まんと、お茶を毎日飲むかわりに食べたらええやないかという議論も出てきたわけです。お茶を食べるいうたって、そのままムシャムシャ食べるわけじゃなくて、飴にしたり、ふりかけにしたり、いろいろ料理の方法が後ろにも書いてありますけれども、お茶を食べるいうそこまで極端な話に今なりつつあるんで。

戦後、日本人が日本食から離れつつありますね。お茶の消費は伸びてないんです。むしろ減ってるんです。しかし、日本人の寿命は伸びてます。この間もうちのゼミナールの学生に、30人近くおるんですけれども、家で茶びんのない人に手を挙げさせたらおるんです。ばく聞いたんです。あんとどこ、お茶はどうしてんの言うたら、お茶は冷蔵庫にありあます。

変なこと言うなと、冷蔵庫にあるて何やと、おかあさんがペット買うてくるというわけです。ウーロン茶です。そうか。あんとどこ、お茶漬はどないすんねん言うたら、ウーロン茶でお茶漬する。へええ、それやったら、毎朝あんとこ仏さんにお茶じょ差し上げるでしょう。そのときのお茶はどうしてんのと言うたら、ご飯は差し上げへんと、何上げてんのんと言うたら、パンやと。そう、あんとこの仏さんパン食べはんの。また変わった仏さんやなと。

普通は、朝沸かしたお茶を仏さんに上げる

んだけれども、神さんは水ですが、仏さんはお茶ですよ。まあね、世の中変わってきました。

私先ほど言いましたように30年前にイギリスに1年間留学して、帰ってきた。今やったらロンドンに何十軒と日本食の料理屋があるんですが、あのときは1軒もありませんでした。帰ってきて、何が食べたい言うたら、やっぱり日本料理やということで日本の食堂に入ったわけです。

30年前ですからそんなにいい料理屋はありません。いらっしやいませ、お茶を持ってきた。イギリスでは絶対に入っても、注文しなければ持ってきてませんよ。日本の場合は、いらっしやいませとお茶を持ってくる。このお茶はただです。イギリスでは絶対にお茶を飲んだら、お金が要ります。サービス料、チップも要るんですよ。

お茶の心

このただのお茶は何やと思うた。もとはお金がかかってますよ。ただであるはずがない。これは何だろうか。これは、やっぱりお茶にもてなしの心、やっぱりお茶というのは心ですよ。

私は、お茶というものはこれからますますコミュニケーションが大事な時代に、お茶くみややいう女の子が増えたという話ですけども、お茶の心、きょうは健康と文化ですよ、きょうのは話は、だから健康だけは衛生関係やから健康をもっと言うべきかもしれないけれども、やっぱりお茶で大事なものは文化ですよ。

コーヒーも結構ですよ。しかし、やっぱりお茶、心、あんな高い抹茶の道具を言い出したらキリがない。しかし、やっぱり心は大切にしたいと思いますね。そのへんをきょうの結論にしたいと思います。